

『天才の精神病理 ～科学的創造の秘密』

飯田 真／中井 久夫 著

(岩波現代文庫 ¥1,100)

ニュートン、ダーウィン、フロイト、ヴィトゲンシュタイン、ボーア、ウィーナーの6人の科学者たちのそれぞれの精神病理、人間関係、業績、内面的な危機的状況と回避の仕方、病気、病気からの回復が書かれた本である。

小学生時代、近代科学の父といわれるニュートンと錬金術は、なかなか結びつかず違和感を覚えた記憶がある。

孤独な少年時代をおくったニュートンは、他人から脅かされやすく敏感で、たえず人と距離をとる努力を払い続けた。理解ある庇護者の出現で創造性が開花するが、成功が人との距離を縮めてしまい、破綻をきたしてしまう。それに続く病的な時期をへて、錬金術等の自閉的な世界に引きこもることで、安定し回復するという彼の心理機制が書かれている。精神療法で「自閉のすすめ」が言われることがあるが、錬金術への没頭は、彼と病いの折り合いの結果ともいえるように思う。

ヴィトゲンシュタインは生涯、発狂の恐怖とたたかった。彼は自分の危うさをよく知っていて、内面的危機状況になると、庭師、荷物運搬人等の肉体労働をしてきりぬけた。彼は、死が近いことを知らされた時、「あの人たちに言ってください。私の生涯は素晴らしいもの wonderful であった」と語った。

著者も「彼がたえず発狂の恐怖にさらされながらも生涯もちこたえ、むなしくない爪痕を残したのにはまさに驚嘆すべき wonderful なことである。われわれ精神科医にとってもそれは素晴らしい」とつけ加えている。

病蹟学にとどまらず、著者の深い治療観と人間観に裏づけられていて感動する本である。(北村桂子)

『金子みすゞのころ』

矢崎 節夫 ほか 著

(佼成出版社 ¥1,600)

里中満智子や片岡鶴太郎、玄侑宗久ら各界の著名人による金子みすゞ論である。

金子みすゞといえは、「みんなちがってみんないい」を思い浮かべる人が多いと思う。「わたしと小鳥と鈴と」と題する詩の結びである。しかし、「みんなちがって」に続けて「みんないい」と言い切ってしまうと本当にいいのだろうか。なるほど「みんないい」には生きとし生けるものへの深い慈しみを感じる。金子みすゞには世界はそう見えていたのだと思う。でも煩悩具足の我々には世の中すべての人間をそのまま受け入れることはなかなか難しいのではないだろうか。

別の角度から考えてみる。この世で生きていくためには一定の文化の型に入らねばならない。成長の過程で「あるべき」立ち振る舞いを身につけると、人は「あるべきではない」対立像を同時に作ってしまう。このことを横塚晃一は『母よ！殺すな』で、「人間というものが、人間という言葉ができたのだと思われるが、一旦言葉ができてしまうと、言葉によってものが規定されるのである。そしてそれは常にあるものをその類から排斥することによって成立する」と言っている。悲観的な見方かもしれないが、人は「自分はそうあってはならない」イメージを集約した「否定的アイデンティティ」を、自分の外側に、自分よりも「下の人間」に押し付けることによって、はじめて自らのアイデンティティを形成することができるのである。

そうした人間の本性に潜む排他性を金子みすゞは知っていたと思う。「みんないい」とは、だから、さりとて言っているように聞こえるけれども、一種の覚悟、決意表明なのではないか。

我々凡人は「みんないい」とは言い切れない。しかし(ここが重要なところだが)もっと高いところから眺めれば、やはり「みんなちがってみんないい」。その矛盾を抱きながら、「みんないい」と言える世の中に少しでも近づけていこうとすることが、逆説的だけれども、人間的な営みなんだろうな。(彦根 睦)

あとがき CDの音楽をパソコンから取込んで携帯電話で聴くことができる、大容量(1GB)のICカードを使えばCDにして約20枚、25時間分！これが、わたしの今年の大発見である。おかげで、通勤時の新聞・雑誌代がからなくなった▼携帯電話で聴いているのはクラシック、それも少人数の室内楽である。まず、イヤホンの外に音が漏れることはない。バッハ以前の古楽からフランス近代音楽…と、CD20枚にはいろいろなレパートリーが入る。それをランダム設定しておくと、1曲ごとにピアノあり、器楽あり、オペラのアリアあり、実は武満徹などの現代音楽も何曲かまぜてあり、長いものでも5分程度で曲ごとの脈絡なくごちゃまぜになって再生さ

れる。瞬時にアタマ(耳?)を切り替えないと違和感だけが耳に残る▼私の勤務する相談室にはさまざまな悩みを抱えたお客様がみえる。終業時のミーティングで一人ひとりについての短い時間での報告を聞きながら、次々と浮かぶそれらの人の先々にも思いをはせつつ、一日の仕事を振り返る▼古典的なケースワークの手法が必要なもの、医学的なモデルを優先させるもの、より現代的な就労支援や余暇支援が適しているように思われるもの…ともすれば、得意のパターンのみに頼りがちになるのを自戒するとともに、思考の切り替えを随時おこなって、気持ちをフレッシュにしておくことが大切と思う。(皆野正裕)

福祉の主体者——それは障害をもつあなたです！

かざぐるま



185

2008.6
目次

風：“ひとつの花”から(國本翠)	2
横須賀市療育相談センターの開設(中谷圭子)	3
「わかる!」「できた!」で生きていく力を身につける子どもたち(田沼美穂) ...	4
手話の公用語化を求めて～NZ研修を通して(グループDeaf+) ...	6
支援の反対側にある「自立」?(飯島克巳)	8
わが子の巣立ちを見守って④ たさんの人に支えられて(斎藤悦子)	10
本：『天才の精神病理』『金子みすゞのころ』	12

発行：神奈川県保健福祉部
編集：小児療育相談センター
広報委員会

身近なニュース、活動報告、その他ご意見ご感想、素朴な疑問などをお寄せください。

〈宛先〉〒221-0822 横浜市新神奈川区西神奈川1-9-1
小児療育相談センター 広報委員会 TEL:045-321-1721 FAX:045-321-3037
Eメール: shoniryoiku@shinseikai-y.jp

風

“ひとつの花”から

國本 翠

(鎌倉女子大学短期大学部)

“ひとつの花”という今年のテーマを持って第24回目のフラワーデザイン展を開いた。

トルコキキョウとアスパラの葉のみでいっぱい飾られたいつもの画廊。

一言にトルコキキョウといってもなんと姿かたちの違うことよ。限りなくバラに近い花、ボタンのような花、われこそは元祖トルコキキョウと主張する花、色も形も大きさも様々、一輪一輪の表情も違う、そしてどれも美しい。中心は塔のごとく、周囲は風に吹かれて飛ぶ雲のようにアレンジされた花、花、花…。

人も同じ、一人ひとり姿、性格、大きさ、もっている力が違って、それぞれ個性がある。だから一緒に居ることがすばらしいのだと思いつつ、今年も、私の中の大きなイベントがスタートした。「明日から三日間、一緒に元気で過ごそうね」と花に話しかけながら。

足を運んでくれた一人ひとりにコサージュをつくってプレゼントする。しばらく胸につけて共に楽しんでいただく。仕事も環境も住んでいるところも年齢も違う仲間が年に一度ここに集う。たくさんさんの花に囲まれてすごす数日間はこの上なく心地よい。花に魅せられて集まった仲間がすべて手作りで20年以上続けてきている。参加できるメンバー十数人の年も数人の年もある。数年休んでの参加も笑顔で迎えるグループ名は「歩」(ぽ)。花をきっかけとしての人と人との繋がりが嬉しい。日常と全く違う空間を持つことでリフレッシュし新鮮な気持ちで日常に戻ることができる。

今年も素敵な香りを残して私たちのイベントが風に乗っていった。

表紙のことは：アジサイの丘を行く登山電車
(箱根町)

この時期、ライトアップされた花々が観光客を楽しませる。

＜撮影＞：岡本 吉弘



はじめてボランティアさんと外出（中3）



成人式



家族でグアムへ

ました。そこは午前・午後とストレッチ体操やボルコンの解体・碇子はずし等を立ってする仕事に取り組みました。指先を使つての仕事がピッタリ合ったのと規則正しく見通しを立てて一日が過ごせるのが良かったのか、夜は疲れからか一度も起きず静かな日々が戻ってきました。その後正式に通所が決まり、また私の送迎が始まりました（家から車で片道40分）。

“生命の危機”を経験

平和な我が家にまた最大の事件。雅俊が風邪をこじらせ肺炎を併発し、あれよ、あれよという間に生命の危機が！「自閉症」というだけで受け入れてくれる病院がありません。挙句には「昔は障害がある子供は5歳までしか生きられなかったけれど、今は医学が発達しているから長生きして困るよね」と病院の院長に言われてショックを受けました。

その後、大勢の人たちが受け入れ先を見つけてくださり、受け入れてくれた病院では自分の意思を伝えられない雅俊に代わり、くさぶえの職員が一生懸命説明してくれたり、医師達はなにがあっても助けますと努力してくださり、一命を取り留めました。本当に感謝です。

ICUでたくさんの機械につながれ必死に頑張っている姿の雅俊と対面したとき、二度と「この子がいて大変だ」とか、「もっと楽な人生が私にはあったのでは」「この子がいたから何もできなかった」と言うのをやめようと思い、心から謝りました。

グアム旅行の楽しみ

大変なこともありましたが、楽しいこともありました。養護学校を卒業する時、10人の親と「20歳になったら親子でグアムに行こう、皆で行けば怖くない！」と「遊遊会」を結成、毎月積み立て貯金を始め、20歳の12月の実現を目指しました（このときはグアムに最大級の台風が直撃して飛行機が飛ばずキャンセル、トホホ…）。そして翌年には3家族8人で実現させました。

その時の楽しかった思い出が忘れられず、今度は家族4人で毎年12月には真夏のクリスマスを楽しみに出かけています。団塊の世代の主人は仕事人間で、家庭のことは私まかせでした。しかし周りの人たちの目を気にせず思い切り楽しめるグアムが気に入る、雅俊とプールや海で子供のように遊んでいました。

この子がいたからこそ！

健常者ならば自然に独立し、我が家を飛び立っていきますが、たまたま障害を持って生まれただけで飛び立っていきません。

これからもたくさんの人たちの支援をうけながら生まれ育った地域のなかで生活させたいです。

横浜の身体障害者施設を見学したとき、その施設長さんが「この子がいたから何もできなかったと思うより、この子がいたから沢山の人たちと出会い、人間として成長できた」と話されたことが印象に残っています。この言葉のように思えるよう、ともに歩いていきたいと思っています。

わが子の巣立ちを見守って④

たくさんの人に支えられて

斎藤 悦子（川崎市）

二男の誕生

我が家の二男「雅俊」は現在25歳、川崎市自閉症通所施設「くさぶえの家」に通所しています。

振り返るとずいぶんたくさんの人たちに支えられ今日まで来たような気がします。

子供に恵まれなかった私達夫婦に待望の長男が誕生したのは結婚して6年目のことでした。あきらめていた頃なので喜びは言葉にならず、大事に育て過ぎ、子育てはとても大変でした。

そして2年後、二男「雅俊」が誕生しました。二男ということで長男の時の子育てを反省し、あまり手をかけず、また手のかからないおとなしい子供でした。親にとって楽で子育てしやすい子が「自閉症」という障害を持って生まれたとは…正直、目の前が真っ暗、絶望的でした。

就学まで

いろいろな医療機関に通い、保健所から川崎市南部療育センターを紹介され、親子で通い始めました。そこではさまざまな障害児を持つ親たちと出会い、共に生きることを教えられました。

その後、義務教育前に一度健常児の中に入れたと思い、幼稚園に1年間だけ通園させました。障害児は雅俊一人。同じ5歳の子供がこんなに違うのかとショックを受けました。超多動・言葉はほとんどなし、ただ単語による理解力が少しあったので、専門家による指導方法はないかと探していたところ、小児療育センターの学習指導室を紹介していただきました。月2回ぐらい通いました。集中力を身に付け、生活習慣や学習することを学びました。

小・中学校の頃

小学校は普通の学校の中に養護学校の小学部が

あるような、1年生から6年生まで30名ぐらいが集団で行動し、普通級とも交流する川崎市立東桜本小学校「たんぼほ学級」へ入学しました。

人間関係が希薄な子が先生と楽しく関係を持ち、特に今まで親と離れたことがないわが子が初めての宿泊訓練へ、とても心配でしたが、笑顔で帰ってきた時は思わず涙が出てしまいました。

学校生活は楽しく過ごしていたのですが、少しずつ自我が芽生え、こだわりが強くパニックが一番多く出た時期でもありました。ちょうど長男の受験と重なり、私の気持ちが離れていたこともあり、気に入らないことがあると頭をたたいたり、私の腕に噛みついたり母子関係は破壊的でした。

養護学校の中等部に入学してからは少しずつ成長し、私に対する暴力はピツリと止まりました（私の気持ちが少しずつ雅俊に向いたからだと思いますが）。そこで友達のいない雅俊に何とか友人の真似ごとができないかと相談し、大学生のボランティアさんが来てくださり毎週土曜日、横浜のプールに連れていってくれました。

卒業後の進路

高等部に進学すると卒業後の進路について考える時がきました。6年間横浜の養護学校に車で送迎していましたので、この辺で子育て終わりと勝手に私の思いが優先し、送迎バス付きの地域作業所に決めてしまいました。しかし自閉傾向の強い雅俊は一日なにもする事がなく、大勢の人が広い部屋の中でテレビを見たりラジカセを聞いている場所は居心地が悪く、そのストレスが家に帰ってから出ました。

体力を持て余し、夜はほとんど寝ず睡眠障害に。当然家族はイライラ私に当たり、私は雅俊に当たりと悪循環でした。困り果てた私は自閉症専門の更生通所施設に相談に行き、2週間の実習を受け

横須賀市療育相談センターの開設
横須賀市が目指す療育支援

横須賀市こども育成部こども青少年支援課 中谷 圭子

平成20年4月、療育相談センターがオープン

子どもに関する総合支援体制の中核機能を担う施設「はぐくみかん」内に、指定管理者：社会福祉法人新生会が運営する療育相談センターが開設されました。

横須賀市療育相談センターの開設の経緯

地域療育システム検討委員会による「今後の地域療育システムのあり方について」の報告書を受け、「（仮称）こどもセンター基本計画」の中で、地域療育システム及び療育相談センターの開設計画を示し、平成18年から開設に向けて準備を進めてきました。

横須賀市の療育の理念

発達の遅れや障害のある児童が将来、身近な社会資源を有効活用しながら、地域社会の中で市民として生活し、社会参加、自己実現ができることを目標に乳幼児期からの相談や療育を行います。また、関係機関と連携し、ライフステージに沿った支援を行っていきます。

療育相談センターの組織

管理課	管理・運営
通園課	知的障害児・肢体不自由児通園施設
診療課	診察・検査・訓練・評価
地域生活支援課	相談・地域支援・療育教室
スタッフ	医師・保育士・児童指導員・ソーシャルワーカー・看護師・臨床心理士・理学療法士・言語聴覚士・作業療法士・臨床検査技師・栄養士・事務

療育相談センターの機能

①療育相談機能

- ・高度な専門性を必要とする発達支援のための医療（相談・発達検査・診断）の実施とそれに基づく個別療育プログラムの提案
- ・療育プランに基づく療育支援の実施（早期療育教室・通園施設・外来訓練・巡回相談など）

②地域連携機能

- ・就学前から学齢期には、健康福祉センターの教室への巡回相談、診断がつかない時期から利用できる親子教室の運営、保育園、幼稚園、学校、地域訓練会への相談活動のほか、家庭への訪問指導活動を実施する。学齢期以降は、福祉事務所、保健所、社会福祉施設、就労先等の本人の関係する社会資源との関わりが円滑に進むよう、本センターの有する療育情報を有効活用し、生活支援視点で家庭、地域との連携を図る。

③家族支援機能

- ・保護者グループ等のネットワークが、インフォーマルな支えあいとなり生涯を通じた心の拠り所となるようピアカウンセリング、学習会への講師派遣等の支援を行う。

おわりに

新しい施設での療育相談センターが開設され、2ヶ月が過ぎました。

療育相談センターを利用される市民の皆様から、様々なご意見を頂き、療育相談センターへの期待とその責任の大きさを実感しています。

横須賀市の療育の中核機能としての役割を担うため、専門性を十分発揮し、将来、児童が主体的な地域生活を営めるよう、関係機関との連携を図りながら、伴走的な支援を実施していくことを目標としていきます。

「わかる!」「できた!」で 生きていく力を身につける子どもたち

横浜YMCAトライアングルクラス 田沼 美穂

◆成長した「元・子どもたち」

「やっぱりシンプルなカレーにしようよ」
「そうだね、みんなが食べられないと困るし」
「隠し味にチョコレートを入れるとおいしいって聞いたことがあるけど…」
「それ、やってみる??」

今夜は「土曜クラス」のカレーパーティー。決められた予算内でグループごとにカレーやナン・サラダにデザートを作って、みんなで食べる楽しい時間です。買い物から後片付けまで自分たちの力で進めます。

「土曜クラス」は高校生以上の青年のためのクラスです。彼らは小中学生の頃からトライアングルクラスに在籍し、一緒に成長してきた仲間たちです。私たちリーダー（YMCAでは指導者をこう呼びます）は週に1回のクラスはもちろん、季節ごとのキャンプ等を通して「わかる!」「できた!」という体験を、そして仲間から認められるという経験を大切にしながら、彼らの成長を見守ってきました。

◆彼らの強さはどこから来る?

年齢が上がるに従い、社会で求められるマナーやスキルも厳しいものになりますから、彼らを厳しく叱ったり、細かいアドバイスをすることも多くあります。人は誰でも叱られたり、自分のやり方についてとやかく言われたりするのは決して嬉しいことではないと思うのですが、彼らはリーダーからの指摘やアドバイスを素直に受け入れ、それを自分の力にしていきます。彼らのことを「すごい!」と思うのは、そんな時です。

保護者の方からは「それはリーダーのみなさんとの信頼関係があるからですよ」と言っていたこともありますが、私は決してそれだけではない彼らの「強さ」を感じています。そして、彼ら

の「強さ」の源は、彼らが小さい頃から積み重ねてきた「自信」、そしてありのままの自分を認めてくれる「仲間」の存在なのではないかと思うのです。

◆Aくんのこと

社会人として働いているAくんから「ぼくの所属するゴスペルグループのコンサートがあります。ぜひ聴きにいらしてください!」というメールを受け取りました。歌を歌わせたら右に出る者ではなく、キャンプでもクラスでも歌を歌う場面では（もちろんそれ以外でも!）みんなの中心にいたAくん。ステージの上で仲間たちと一緒に歌うAくんの声は、相変わらずマイクがなくても私の耳にしっかり届きました。一緒に歌っているグループの方たちはAくんの個性をよく理解してくださり、いけないことをすると「だめだよ、Aくん!」と声をかけたり、Aくんの豊かな声量を「すごいね!」とほめてくださったりするのだそうです。

みんなに愛されながら自分の良さを発揮できる場所で、彼はまさしく「水を得た魚」のように生き生きと輝いて見えました。

◆彼らを支えているものは

就労を目前にする年齢になると、彼らは自分の個性や特徴と向き合い、それを受け入れるための厳しい現実と直面することになります。

先日、「手帳を取ろうか迷っている」と悩んでいる、トライアングルクラスに在籍する高校生と話をしたのですが、その時、彼が「みんな苦手なことばかりじゃないですよ。得意なこともある。みんな違うけど」と独り言のように言いました。自分だけではなく、友だちひとりひとりが違う良さを持っているということを言葉で伝えられ

そうに伝える。丹念に聞いていく言葉の中に、「わたしのこころ」とか「自分の気持ち」などという言葉が聞き取れる。エッ!そんなこと言うのだ、とはっとする。こういう体験はありがたいもので、嬉しい体験です。

◆支援の反対側にある「自立」とは?

彼らが自分たちの意見を言い始めると、何となくそこに輪ができます。聞こうと思うのか、自分も言いたいと思うのか。しかしその集団の中心には職員がいるような気がします。職員に聞いてもらいたい、職員に言いたい、多分そうなのでしょう。

報告書の真ん中あたり23ページに“さくら会の方程式”というのが出てきます。「孤独と反対にあるのが友達。自立の反対は孤独だ。友達と出会う仲間を感じて、悩みを分かち合えば自立の一步が始まるね。だから友達は生命線」と紹介されています。なかなか明快。支援者のAさんは「自分たちと同じだ」と言います。

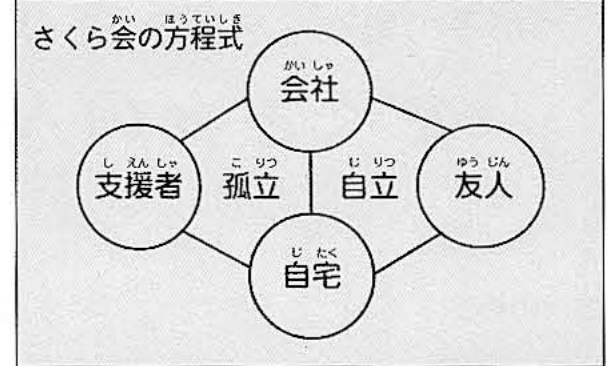
確かにそうですが、簡単にそうだねと言えない自分もいます。何で支援者と反対側に自立があるのか、障害のある人の自立を目指す制度の中で仕事をしている自分たちは、その場合、何の役に立っているのか。以下はそのことについて考えていることです。

◆友達は施設の外にいる

私たち施設で働く職員は利用者の集団に例えば自治会のような機能的な繋がりや友達としての情緒的な繋がりまで求めてしまいます。しかし機能的な繋がりではできるかもしれませんが、はたして友達ができるかどうかはわかりません。少なくとも、施設の利用者同士が必ず友達になるというのはあり得ないことです。

しかし、どうも私たちの日常の中では、あの利用者との利用者はぶつかるから班を変えようとか、時間を変えようとかという話が多い。利用者からも「あの人はうるさくて嫌だ」「付き合おう付き合おうとしつこくて嫌だ」という話の方が多いような気がします。

『報告書』の座談会やシンポジウムを読むと、「さくら会」のメンバーの出会いはどうもそのような施設内の関係からかなり遠いところを舞台と



している気がします。同じページに「友達がいない人は、どうしたらいい?」という質問に「お金をためて全国大会に来てください」と答えている発言があります。「施設内で仲間とよく話し合いましょう」とはなっていないのです。

◆新しいものが生まれる場所は

私は、むかし勉強した経済学者の言葉…『歴史的に見て最初の商品経済は掟で縛られる共同体の中からではなく、掟の及ばない共同体と共同体の間に発生する』というフレーズを突然思い出し、友達は施設と施設の間に生まれる…そういうことかと納得してしまいました。

しかし施設にとってはなかなかリスクなことです。「施設外交友」と書いてワープロで変換を間違えると何とも危なっかしい印象がします。現に他施設の利用者との関わりで悩みパニックになる利用者もいて、胃をさする担当職員の姿が頭に浮かびます。

◆支援の先にある世界を想像して

昨年秋に「つばめの会」のメンバーと職員は富山の全国大会本人部会に出かけました。交流会では大勢の人たちと名刺交換をしてきたようで、帰ってきてこんなに名刺もらったよと誇らしげに語っていました。

利用者の発言を支援する営みの先に、そしてその営みの中から、利用者の人たちにとってかけがえのない友人関係ができたら良いと思います。そんな想像力をこの報告書からいただいた感じがします。

報告書（1部1,500円）をご希望の方は、氏名・送付先を記入してFAXで申込みを。
FAX 048-754-1288（秋山宅）

支援の反対側にある「自立」?

多摩川あゆ工房 飯島 克巳

支援者として、大変興味深いアンケート報告が出版されました。本人の会「さくら会」が企画・実施した『仕事とくらしのアンケート調査報告書』です。内容と感想を紹介するまえに少し自己紹介します。

◆利用者本人の活動

私が勤務する施設（多摩川あゆ工房）は知的障害のある人の通所施設です。昨年の4月より新しい事業体系に移行しましたが、自立支援法以外のこともやりたいと思い、今までなかなかできなかった利用者本人の活動の起ち上げを計画し、わずか1年ですが、以下のようなことに取り組みました。

1. 本人活動支援について研修会を開催。
2. 自分の意見を言いたいという利用者が本人の会を結成。「つばめ会」と命名。
3. 自分の意見をまとめる（パワーポイント）。
4. 施設のお祭りで意見発表会。好評を得る。
5. 全国大会本人部会に参加。各地の人と交流。

◆「報告書」との出会い

今年の職員研修会では、本人の会「さくら会」の阿部八重さんに来ていただき、『私たちの声で暮らしを変えよう 仕事とくらしのアンケート調査報告書』を紹介していただきました。

「さくら会」は1990年にパリで開催された本人の国際会議に参加した当事者の方たちが日本に戻ってから結成した本人の会です。

さくら会では昨年1年間、全国各地の本人の会50カ所にアンケート調査を実施、さらに3カ所の訪問調査も行って、障害のある人たちの仕事と暮らしについて報告書にまとめました。6月16日付の『福祉新聞』にも本人が企画・分析した調査は初めてと紹介記事が載っています。

◆支援者は職員と限らない

内容について印象に残るところをご紹介します。前半のアンケート調査の結果と分析は冷静に、就労している知的障害のある人たちの生活の実態

を分析しています。そうか、意外だなと思うことも多々あり、自分の経験だけからの判断の狭さを実感しました。

例えば「就労を支援してくれる人はいますか？」との問いに「はい」と答えた人が半分以上います。意外と多いなと感じました。そして本人調査員の訪問調査によると、その支援者が福祉サイドだけではなく、会社の上司や同僚も含まれていることがわかります。そういう人を含めて支援者として理解するところに、知的障害のある人たちの生真面目さを感じます。

また福祉側から見れば様々な「インフォーマルな支援」がそこには実際にあるのでしょう。そこに私たちが学ぶべきことも多々ありそうな気がします。

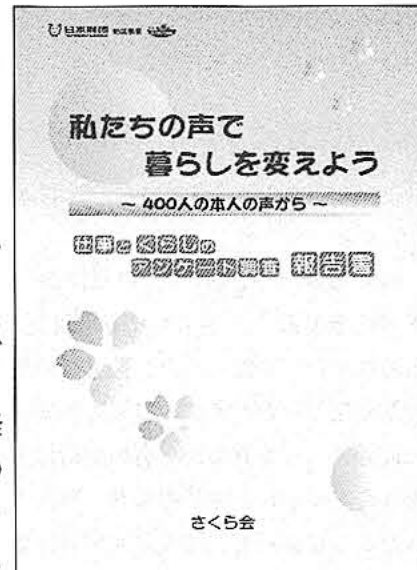
◆「友人が生命線」ということ

後半からの座談会やシンポジウムの記録では逆に「友だちが仕事と暮らしの生命線」であることが熱っぽく語られています。私たちの研修の中でも阿部さんが今の自分があるのも「さくら会」の活動に参加したからだと言っていました。報告書からもその思いがしっかり伝わってきます。

◆あらためて私たちが考えること

先にもご紹介しましたが、今、私たちの施設でやっていることは、本人が自分たちの意見を発表しようということ、そして職員がその内容をまとめるお手伝いをする。その先に「さくら会」のような友達の支えがあれば良いと思います。が、実際にはまだそのような体験はないです。

彼らの言っていることを紙に書きながら聞いている。あっ、そういうことかと前と後が繋がる。「こういうことね?」と言うと「そう!」と嬉し



るなんて成長したなあと嬉しく思いました。

自分の苦手な部分を認め、それを受け入れるという厳しさを乗り越えていく時にも、やはり、「自分にはできることがある!」という自信、そしてありのままの自分を受け入れてくれる「仲間」の存在が、彼らを支えていくように思います。

◆「あしたはYMCAだね!」

トライアングルクラスに通う小学生のBくんは、教室まで1時間半以上かかる場所に住んでいるのにも関わらず、毎週、遅刻も欠席もなく通ってきてくれます。のんびりとした優しいお子さんですが、通常級の中で自信を失っていました。ところがトライアングルクラスのプリントなら「かんたんだよ!」「ひとりでする!」。友だちと一緒に学び、一緒に遊ぶ。そんな当たり前のことが彼のやる気を大きく育てています。

「生まれて初めてYMCAという『生きがい』を見つけたようです。トライアングルクラスの前は『明日はYMCAだね!』と言って、自分で全部準備をするんですよ」「ソーシャルスキルトレーニングの時に見せる笑顔は今まで見たこともない笑顔でした」と、お母さんのお話を伺うたびに、彼にとってトライアングルクラスの存在が大きなものであることを感じます。

◆友だちから認められる経験

中学生のCくんは、学校での友だち関係がうまくいかないことを心配したお母さんと一緒にYMCAにやってきました。勉強はよくできるのですが、自信のない様子が初対面の表情からも伝わってきました。暗い「負のオーラ」のようなものが彼の回りを取り囲んでいたのを今でもよく覚えています。

トライアングルクラスでは中学生になると、行動や態度、言葉遣いなども厳しく指導をしていくことにしています。しかし、それを後回しにして、私たちが彼にしたことは、褒めること、そして友だちから認められる機会を作ることでした。

最初はまったく自信がなく、選択肢があっても答えを選択できなかったり、クラスが始まる前の

時間に、みんながサッカーをして楽しんでいる、遠くからじっと眺めたりしているだけでした。ところが、半年たった今では、グループでの話し合いの進行をする役目を引き受け、自分のところに転がってきたボールを笑顔で蹴り返す姿が見られるようになりました。ここでも、彼の変化を促し、支えたのは、「自分にもできることがある!」という「自信」と、ありのままの姿を認めてくれる「仲間」の存在だったように思います。

◆「わかる!」「できた!」が生み出すもの

トライアングルクラスでは「わかる!」「できた!」という経験を積むことを、何よりも優先しています。トライアングルクラスに入会を希望される保護者の方には「生きていくのに必要な力を身につけることを大切にしています」ということをお伝えするようにしていますが、それは単に、生きていくために必要な学力やソーシャルスキルを身につけることではないと思っています。

学力やソーシャルスキルを支えるのは、「わかる!」「できた!」という「自信」と、一緒に成長していく「仲間」を持つことだと思うからです。そしてそれが何よりも彼らの「生きていくのに必要な力」となると思うのです。

中には「YMCAの勉強は簡単すぎる」「学校の内容に沿ったものをやってほしい」というような要望を口にされる保護者の方もいらっしゃいます。それでも私たちが「わかる!」「できた!」ことにこだわるのは、このような理由があるからなのです。

横浜YMCAトライアングルクラス
「困っている子どもと困っている先生のための
～学校の先生のための研修会～」

日時：2008年8月4日（月）～6日（水）
場所：湘南とつかYMCA
内容：「読めない」「書けない」子どもへの支援
教室でできるソーシャルスキルトレーニング

お申込み・お問い合わせは湘南とつかYMCA
045(864)4768（担当 星野）まで

手話の公用語化を求めて ～NZ研修を通して～

グループDeaf+（デフプラス） 赤松あゆみ 山岸枝里子 内山あゆみ

みなさん、こんにちは！

はじめまして、Deaf+（デフプラス）です。

私たちはダスキン愛の輪障害者リーダー育成海外研修派遣事業の助成を受け、2006年8月9日～20日、ニュージーランド(以下、NZ)を訪れたので報告します。

2006年、手話が公用語に

2006年4月、ニュージーランド手話（以下、NZSL）がNZの公用語に制定された。人口415万人のNZで、日常手話を使う人の数は2万8千人と見られ、その中の7千人が聴覚障がい者といわれている。日本での35万人の聴覚障がい者のうち日常会話以上の手話ができる者を14%とみると4万9千人である。日本より圧倒的に少数の聴覚障がい者のための手話が、NZ全体の公用語となったのである。

私たちはNZで手話が公用語になったその意義を確かめるべく、国民の驚きと欲びに沸いているであろうNZを調査した。調査する際に、私たちの研修の目的として、以下の2点を掲げた。

- 「NZ手話法」制定に向けて全体的にどのような施設、機関団体が関わってきたのか
- 世界の聴覚障がい者にとって、この公用語制定化はどのような意味をもたらすのか

NZ手話法制定に関わった施設や機関

まず、NZにおける施設や機関を3つの分野に分けて紹介する。

★聴覚障がい者への教育的サポート

NZには2つのろう教育センターが存在し（パンアッシュ、ケルストン）、日本で言えば、ろう学校のような役割を果たしている。聴覚障がい児に対する教育だけにとどまらず、健聴の子どもが通う学校に通学するメインストリームという方法をとっている聴覚障がい児に対しても、ろう教育センター在籍の教師を通訳者として派遣、手話を知らない親や先生に手話指導、教材作成・販売なども行い、幅広いサービス体制でサ

ポートしている。

聴覚障がい者に深い関わりを持つNZにおける人材育成機関として忘れてはならないのは、ビクトリア大学、オークランド工科大学の2つである。

ビクトリア大学には、ろう文化や歴史を研究しているグループ（Deaf Studies Research Unit =DSRU）があり、NZ初の手話辞典が作られた。またこのDSRUはNZSLの公用語化に向けての活動に深く関わっている。同大学には手話指導のコースがあり、手話を指導する講師資格を取得することができる。

オークランド工科大学はNZで唯一、手話通訳者養成コースが設置されている大学である。そのコースを修了した者のみが手話通訳者の資格を取得できる仕組みになっている。試験の内容は厳しく、レベルの高い手話通訳者が輩出されていく。しかし、NZの手話通訳者は2006年8月現在で60名程という人数不足が深刻な問題になっている。

★生活上でのサポート

聴覚障がい者の生活面におけるサポートとしてDeaf Association of New Zealandという事務所があり、NZ全土に12箇所ある。

地域によって事務所の役割に多少の違いがあるが、大きく分けると①ワーク（聴覚障がい者の就職のサポート）、②サービス（聴覚障がい者の生活やアイデンティティに関するサポート）、③ビジネス（資料作成、資料提供、企画の立ち上げ）がある。読み書きが困難な聴覚障がい者も、DANZのサポートによって生活や就職がスムーズにできるような体制が作られている。

★法律的サポート

NZ政府の中にはOffice for Disability Issue（政府社会開発省問題局）という局がある。ここはNZにおける障がい者の生活上の問題を提起し、解決する対策や方法を他の省に訴えたり実施したりする局である。

この局では政府内にある37団体（日本で言う「省」）に、毎年レポート提出を課しており、それによって、障がい者に対する取り組みやニーズを調査している。

この局は聴覚障がい者の訴えや要望を聞き、議会へ公用語への働きかけを行った中心的存在でもある。

NZの聴覚障がい者の権利運動

次に、NZの聴覚障がい者の権利運動について紹介したい。

今から20年前、NZでは聴覚障がい者の雇用問題も多々起きており、手話も「音声言語より劣ったもの」とみなされていた。また、健常者の聴覚障がい者への理解が乏しいがために、裁判の誤審、病院の誤診などの問題により聴覚障がい者の生活に大きな影響、支障をきたしていた。生活や権利に関連する問題が多々起きたことによって、聴覚障がい者は健聴者と同等のサービス、つまり手話通訳の保障などを求めて政府に「私たちは手話を必要としている」と訴えるビデオレターを送ったり、手話やろう文化の研究をして人々に「手話」を広めていくなどの運動を20年間続けてきた。その結果、2004年に議会にて「NZSL法案」が提案された。法案は第一・第二審議を経て、2006年4月に第三審議会でNZSLが公用語に制定化されたのである。

NZSL公用語化の意味

私たちが約2週間、様々な施設を訪ね、NZの現状などを見聞きして一番強く感じたのは「公用語化することの意味」についてである。研修で「NZSLが公用語に制定化された背景や経緯の調査」をし、あらゆることを知るうちに、手話を一つの言語として認定する、つまり公用語化することの必要性を感じた。

何故NZではNZSLを公用語として認定したのか。そこには様々な背景があった。現在のNZでは、人工内耳を埋め込む聴覚障がい者やメインストリームが増加しているという。それが何を意味するのか。聴覚障がい者でありながらろう文化と触れ合う機会が減るために、手話を使用する人が減っていくことが予想されているのである。「今のままではNZSLは消失してしまうのではないか」という危惧があった。これがNZSLを公用語化するきっかけとなった。

文化を守る：NZSLとマオリ語との共通点

また、私たちは研修でマオリ語についての話を聞く機会に恵まれた。NZSLとマオリ語には共通している部分があるのである。

マオリ語はNZの先住民であるマオリ族が用いる言語である。マオリ族の言語や文化が、渡来してきた英国人によって滅びる危機があった時期があった。そこでマオリ族は、マオリ語やマオリ族の文化を守るために運動を行い、その結果1987年に公用語に制定化された。公用語にすることによってマオリ語とマオリ文化を守ったのである。これと同じように、NZSLもNZSLやろう文化を守るために公用語化を求め、認定された。「自分の大切な文化の一つである、NZSLを守りたい」そういった聴覚障がい者の願いがNZSLの公用語化という目標を実現させたのである。

しかし、NZSLが公用語化され、すぐに結果が見えたわけではない。マオリ語が公用語化されてから長い間をかけてNZに広まっていったように、NZSLもNZ全体に浸透するのに時間を要することだろう。現在NZSLが保障されているのは裁判などの法的な場のみである。今後は様々な場で保障されるようにすることが課題であり、これからがNZにとって本当のスタートである。

手話とろう文化は一体

最後に、NZでの研修を踏まえて私たちは日本でも手話を公用語化する必要があると考える。

現在の日本でも、人工内耳やインテグレーションの増加といった、まさにNZと同じようなことが起きている。さらに、日本手話や日本語対応手話などと、手話の定義も曖昧になっている。ろうの若者のろう運動に対する意識も低下しており、このままでは日本でも手話の存在やろう文化の消失が危惧される。しかし、聴覚障がい者にとって手話は大切な言語である。

手話とろう文化は一体であり、ろう文化なしでは手話も存在しない。聴覚障がい者と手話は一体であり、どちらかが欠けていれはろう文化は成り立たないのである。

「手話や聴覚障がい者のことを理解してもらおう」だけでは「聴覚障がい者のために手話を使うのが当たり前」という認識で終わってしまう。今後の日本社会自身にとっても、私たちのような若い聴覚障がい者がろう文化と手話が重要であるという認識を深め、これを守り発展させ、後世にまで引き継いでいく必要があると考える。